人間と夢

須田　和子

21 世紀を目前に控え、とかく夢のない時代といわれる現代、私たちは、新世紀に向けてどのような夢を描いていけばよいのでしょうか。未来への理想を抱いていくために、今、私たちは何について考えるべきでしょうか。テーマは「人間と夢」です。

バハオラの世界的ヴィジョン――全人類の統合、最大平和の確立、世界文明の展開――をひろく知らしめたい。また、アブドル・バハの精神的使命――日本は燎原の火のように燃え立つであろう・・・・。日本は、他の国々と共に、世界がやがて目撃するであろう人類と国々の精神的目覚めに、先駆者としての役割を演じるであろう――を認識して、曖昧な日本から燎原の火が、日本が燃えて欲しいと筆を執りました。

1992 年 5 月、聖地でのバハオラ昇天百年記念式典に出席し、旧約 3 千年の予言、イザヤが見た幻、夢が実現していることを目の当たりにしました。

荒野と乾いた地とは楽しみ、
砂漠は喜びて花咲き、サフランのようにさかんに花咲き、
かつ喜び楽しみ、かつ歌う。
これにレバノンの栄えが与えられ、
カルメルおよびシャロンの麗しさが与えられる。
彼らは主の栄光を見、われわれの神の麗しさを見る。
（イザヤ書、３５章、１、２節）

11 月、ニューヨークでのバハイ世界大会に出席し、180 ヶ国から集まった、多種多様な人々と交流し、会場と世界本部と全大陸が衛星中継で結ばれて、「地球は一つの国であり、人類はその市民である」というバハオラのお言葉を実感、父の夢を思いました。父の遺書になった昭和 20 年 8 月 15 日の日記「世界統一時代」が、私のバハイに導かれた原点です。

今年、父の 50 回忌を迎えて、父の遺品に触れて、父から子への精神の継承を確認し、語ろうと思ったのです。

2 月 14 日、父の 50 回忌を済ませました。1 月 17 日の阪神大震災で、神戸市東灘区、阪急山手、私の住まいのあたりは幸い無事でしたが、浜側へ行くほど被害がひどく、木造の家屋はぺっしゃんこ、ビルやマンションが傾いたり、壊れたり、がれきの山、被災のすさまじさに息をのみました。消防車のサイレンや余震で、眠られぬ不安な日々、電気、水道、ガスが止まり、電車も動かず、車も通れない。近くの小学校へ来る給水車に長い列、公衆電話もコープもダイエーも人の波、リュックを背に両手に荷物で、線路や国道を黙々と歩く人びとの姿は、いつか見た光景と同じ、服装が軍服やもんぺから、カラフルなヤッケに変わっただけ。図らずも、終戦 50 年の節目に、突然、鮮烈に当時のことを思い出させられました。

命日にできるのかどうか気がかりでしたが、ささやかな法要を行いました。1、2 年前から畳を変えたり、掛け軸——父が日中戦争から帰還の折り、中国人から贈られたもので、お正月から父の命日まで、床の間に掛けるのが習わしになっている——の表装を新しくして、この日を心待ちにしていた母もほっとした様子でした。アルバム、色紙、日記など遺品を見ながら父をしのびました。

世界統一時代

歴史始まって以来の地球上全人類総ての大動乱時代が来た。世界の戦国時代だ。然からば秀吉の如く、家康の如く、世界を統一するのは誰だ。

最後に、そして永遠に勝つ者は誰だろう。全人類は苦しんでいる。全人類に新しい光明を与え、幸福を与え得る者は誰だろう。白人か、印度人か、亜細亜人か。いかなる道が人類に幸福を与えるか。

そもそもこの大戦争は、どうして起きたかをまず考えよう。これは、東洋と西洋の接触による大きな火花なのだ。自然の現象で避けることはできないのだ。

白人は荒涼たる国土に生まれた。人間は誰でも幸福を願い努力するが、白人は幸福とは、光と熱に充たされた、明るい世界最大の富と快楽こそ幸福であると考え、いかにすればそれを建設することができるかと云うことに一生没頭し、研究し、陽性な物質的欲望をできるだけ伸ばして、膨大な物質文明を建設した。

東洋、ことにインドの如き国では、多くの大人物が、如何にすれば世の貪欲と縁を切って、平和な静かな無欲の世界に飛び込むことができるかを考え、陰性な精神的文化を建設した。三大宗教を始め、世界の総ての宗教が東洋に生まれたのは当然である。

西洋人は欲望をピストンに、東洋人は肉体的な、物質的な欲望のカタマリとも云うべき己を打ち負かし、正しい方向に指導するよう、強力な精神の錬成に、何れも幸福を求め、幸福だと思って努力した。世界の現状は、今この西洋の陽電気と東洋の陰電気との激しい火花なのだ。しかし、何時までも陽と陰は反発し合うものではない。やがて一つになり、そこに物心一体の真の人類の幸福な時代が来るだろう。

世界は、地球は、一つの国になりつつある。白人も、黒人も、黄色人も、西洋も東洋もない時代が来つつある。総ての国に、人に、幸福を与え得るものは何か、誰か。

（昭和 20 年 8 月 15 日　父の日記）

バハオラこそそのお方だと思いました。現代の大教育者バハオラ、バハオラの 12 原則・・・父の遺書の新しい時代の到来、文明の源泉の意味がやっとわかったのでした。

おお人の子らよ何故われ汝等すべてを同一の土くれより創れるかを知るや。何人も他より自らを高しとなすべきにあらざるためなり。常に汝の心のうちに何故に汝等が創られしかを熟考せよ。われ汝等すべてを同一の物質より創りし故汝等一つの魂の如く、同一の足を以て歩み、同じ口で食し、また同じ国土に住む義務が

ある。されば汝等の最奥なる本質より、汝等の行為と行動より、一元性のしるしと、世俗超脱の真髄が明白とならん。これぞ我が汝への忠言である。おお光の群衆よ！この忠言を心に留めよ。さらば汝等不思議なる栄光の木より聖なる果実を入手し得ん。

（『かくされたる言葉』、アラビア編68）

私がバハオラという名前に出会ったのは、35 年前、勤務していた大阪ガス本社のガスビル講演場で、バーナード・リーチ氏の「私の生活」を聞いたときでした。流暢な日本語で、まず、芸術には東洋も西洋もないこと、総ての人が美しいと感銘を受けるものが真のものであり、神もしかり、総ての人が自然と頭をたれるものが真の神であり、それは唯一のものであるはずだと話されました。一つのものを心を込めて作り出すことは祈ることである。白人も黒人も黄色い人もみな同じ木の葉である。男女は鳥の両翼であり、男は男らしく、女は女らしく、平等な立場に立たなければいけない。そして、世界は一つの国にならなければいけないと話されました。

自分はかってキリスト教のあり方に疑問を抱いていたが、バハオラの教えを知り、再びキリスト教を信じることができるようになったと云われました。リーチ氏の話には、私の探し求めていた総てが含まれていました。

「勉強させて下さい」と申し出て、教えられた住所を頼りに、神戸、北野町のモンターヂ氏宅を訪ねて、私の前に、「バハイへの道」が開けたのでした。その時応対してくださったのがモンターヂ夫人（元大陸顧問ロホラ・モンターヂ氏の母上）でした。モンターヂ氏宅で集まりのあるときは必ず呼んで下さり、私のことを「私の娘」、「日本の娘」と呼んで下さるようになりました。その頃の私は、2年あまりの療養生活を終えて、社会復帰したばかりでした。肺にできた空洞は治癒しましたが、心の空白を埋めて下さったのは、モンタージ夫人の不動の信仰に支えられた深い愛でした。

バハイにサインした折り頂いた黒い指輪を今もはめています。

1992 年聖なる年のある日、夢を見ました。白髪のおばあさんが現れました。顔がよくわからなかったのですが、父方の祖母と思いました。顔がすぐに消えて、上半身がクローズアップされ、その首と豊かな胸のあたりから、何とも言えない青く美しい光がキラリ、キラリと輝き出ていました。そこでぱっと目が覚めました。今頃どうしてずっと前に亡くなった祖母の夢を見たんだろう・・・。どうして死んでから白人のような体格になったの？あの輝き出ていた光は一体なんだろうと気にかかっていました。

するとモンタージ氏から電話があって、「お母さん亡くなりました・・・」、「あっ、ママンだったんだ」。ママンの魂が肉体を離れるとき、私に別れを告げて下さったのだ。老衰で眠るように逝ったと聞きました。バハイファミリーの強い絆、神秘に感銘を受けました。

この８月、「世界女性会議」ＮＧＯフォーラム in 北京へ行って来ました。オリンピック・スタジアムでの開会式は、趣向を凝らした華麗なもので、最後は総立ち、手に手を取って高く掲げての大合唱でした。真っ向から西日を浴びていましたが、スタンドの向こうに、真っ赤な夕日が沈んでいきました。感慨無量でした。

戦争の日を何も知らない
だけども私に父はいない
父を思えばああ荒野
赤い夕日が、夕日が沈む

（戦争は知らない　寺山修司 作詞）

（これは、毎日新聞社が創設した「毎日21世紀賞」論文募集、第14回、テーマ「人間と夢」に応募したものの要約です。）